

平家物語の研究

— その流動の様相 —

高 津 康 子

序

『平家物語』は、日本文学史上『古事記』と並ぶ国民的叙事詩といわれている。本論文では、叙事文学の特色の中、楽器等を伴奏として語られる口誦文学である点や個人的な原作者を認めがたい点等に焦点を合わせ、この物語について検討してみる。

『平家物語』は琵琶を合手に語られる平曲として存在した。それが語り物であつた以上、必然的に後代改訂増補の筆が加えられる運命をになつていた事になる。そして多数の作者の制作参加と聴衆の嗜好等によつて多くの異本が続出したであろう事が予想される。現にこれは山田孝雄氏の研究によると、十七類七十本の異本が報告されている。ここに『平家物語』を流動の文学としてとらえ、原平家から流布本までの流動の様相を辿つていこうと思う。方法としては、尨大な異本群の中、画期的な異本である屋代本と覚一本（定本がないので『日本古典大系』本を一応使用）及

び流布本を比較検討する事にする。

一 原平家の想定

『平家物語』は、源氏将軍時代以前、即ち一二二二年から一二二〇年の八年の間に成立したと推定されている。その成立事情については、たしかな資料があまりに少ない。『徒然草』二二六段の記事によると、

後鳥羽院の御時、信濃ノ前司行長、稽古の誉ありけるが、樂府の御論議の番にめされて、七徳の舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名のつきにけるを、心うき事にして、学問を捨てて遁世したりけるを、慈鎮和尚、一芸あるものをば、下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、此の信濃ノ入道を扶持し給ひけり。此の行長入道、平家の物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり。（中略）彼の生仏

が生れつきの声を今の琵琶法師は学びたるなり。（『日本古典全書』）

とあつて、原作者が行長で、物語は原初から琵琶語りとして出発した事になる。

行長は、『平家物語』に登場する行隆の子で、叔母には時忠卿の正室で、安徳天皇の乳女がいる。祖父の顕時は、忠盛の娘と契つて盛方を儲けている。このように、行長は平家一門の動向や、逸話を的確に把握できる位置にいた。しかも、慈鎮の翼下にはいつた事は、山門の動向、逸話をも容易にとらえられる位置にいた事を示唆する。また、行長は樂府の御論議に召されるような貴族的教養の深い人だつた。このような背景をもつ行長が原作者だとすると、平家執筆に際して、決して平家一門に敵対感情を抱かなかつたであろうし、平家の興亡や挿話を処理するには、貴族の感覚をもつてなしたであろうと推測される。

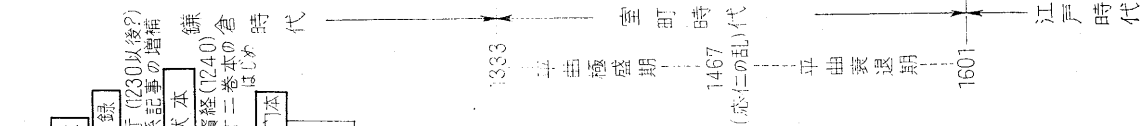
一方、生仏については、その伝記は定かではない。山田孝雄氏は、生仏は正仏の事で、綾小路資時の出家後の姿であると論断されたが、資時のような貴族階級を生仏に想定するより、一芸ある者で、単なる盲目の琵琶法師にすぎないとした方が自然であろう。また、『平家物語』成立以前に、平家に関するエピソードはかなりの範囲で語られていたと思われる。（例、有王説話）目のあ

たりに起つた驚くべき歴史の展開は、人々に文学的契機を与えたに違いない。安元年間から二十年に亘る時代の激変期は、驚異的事件の連続を記録しておこうという意欲を湧きたたせたであろう。こうして、多くの日記が生まれ、巷の盲琵琶法師は語りの好材料を得た。平家滅亡後四五十年たつて制作されたと思われる『平家物語』は、事件に直接関係のある人々が死にはてた頃でもあり、歴史的事実からある程度解放された時期に成立した。また、平家滅亡の動乱が一種の懐しみをもつて顧みられる頃と考えてよい。

山田氏は、『平家物語』の最初の形態は三巻からなるという説をたてられた。東山文庫蔵『兵範記』仁安三年九月の裏書に、「六巻は世間流布十二巻に加云々、六巻は所々流布の物也。十二巻半倍有秘蔵之物」とある。延慶本は、六巻本から十二巻本に移る過渡的な形態といわれ、六巻本から成長して十二巻本になつたらしい名残りを留めている。このように『平家物語』は初期的段階では、今日のものに比べると、かなり小冊なものだつたことが想像される。

そうなると、平家興亡の歴史的事実の叙述で、既に大半の紙数を費してしまふ事になる。しかして、そこに浮かび上がる形態は、必然的に編年体的叙述である。石母田正氏は、「原平家はおそらく年代記という形式をとつた叙事詩」であろうといつて、その年

(五) 系 (五)



代記的叙述に文学的意義を見出していられる。今川了俊の『難太平記』によると「平家は多分後徳記のたしかなるにて書たれども、それだにもかくちがひめありとかや」の記事がある。この『後徳記』は、今日未発見の文書であるが、後藤丹治氏の研究によつて、藤原実定の日記である事が究明されている。実定が没したのは建久二年で『平家物語』の編年体的記述がその頃をもつて終わつてゐる事は注目される。この『難太平記』の記事を事実とすると、原平家の形態は日記的要素が強かつたと思われる。そして、編年体的密度の高い結果、生ずる平家の滅亡を淡々と日時を追つて叙述する。そこに、平家一門が後代の『平家物語』に描かれるような降る涙と共に滅亡していつたのではなく、やるところまでやつて、後は潔く屈託なく時代の中心点から消えていつたと思われる。その姿をかえつて活写してゐたのではないかと想像する。

以上のように、平家の原作者については、多分行長であろうという程度の事しかいえないし、その原初の形態は今日残されてゐないという有様なので、原平家を想定するのは無駄かもしれない。しかし、現在、原平家について大体容認されている琵琶を合手として語られたらしいことと編年体的要素が強かつたという二点は重要である。

ここで眼を今日の『平家物語』に転じてみると、すべての異本

を通じて、編年体的組織は最初から終わりまで物語の形態の基盤をなしている。また『源平闘諍録』に語られたと思われる記号がついてゐる事から始めて、流布本に至るまでこの物語は語りの形式を止めなかつた。（但し、本論文で増補系と呼ぶ異本群は読物に供されるのみだつたらしい）原平家は、この物語の二大特色を早くも確立してゐたとすると、平家はこの時点で、七分通りつくりあげられた事にならう。ここに原平家の存在の想定の意味と文学的価値が認められると思う。

二 成長の経過

『平家物語』は序で述べたように山田孝雄氏の研究によると、十七類七十本の異本が報告されている。この老大な異本は多少の文章の異同の範囲を大きく超えて、全く異質の『平家物語』が同時に存在しているといつた具合なので、その本文研究は難解をきわめ、異本の研究もまだまだ発展途上にある。異本の研究については、山田孝雄氏の『平家物語考』、高橋貞一氏の『平家物語諸本の研究』、渥美かをる氏の『平家物語の基礎的研究』等が主な成果である。三氏の研究をもとに、異本を分類してみると、増補系と語り系（分類名称は渥美説に従う）とに分けられる。『鵲談集』に

一、平家の物がたりは民部少輔時長かきたりけるを合戦の事をばさいかくなしとて源光行にあつらへたりけるとなむ、十二卷平家と云物資経卿書之。

とある葉室時長・源光行の合作になる二十四卷本の存在は読まれる平家、つまり増補系の誕生を意味するものであろうか。これは貴族階級の全面的な制作参加の賜物で、漢文調で話題が豊富である。語り系は諸本の正流とでもいふべきものであるが、この二系は彼我影響し合つて成長していった。語り系の一方流は灌頂巻をたて、八坂流はたてない。次に諸異本と平曲家の系譜を併記した表を作製し、その流動の様相を概観してみよう。

(H) 記事の増補

『平家物語』が個有の作者の作品である事は成立後いくらかも経たないうちに忘れられ、種々な階層の作者が各々の立場で制作に参加し、彼等の好みのものに変貌していった。殊に一三三〇年の覚一本成立までの百余年間にその傾向は最も著しい。この時期には荒削りの年代記的性格からの転換がみられる。つまり、女性説話や和歌等の挿入によつて、王朝的雰囲氣を付加したのであり、その結果、叙事詩的性格に抒情詩的性格が混合されたことになる。この期に菅原為長や藤原為家等の貴族階級の増補作者が挙げられているのは頷けることである。この百年の間に、増補された記事

は、増補系、語り系をとわず相当な数にのぼり、大部なものになる。この増補記事は諸本の本文を校合すれば、ある程度つかめ、実際、興味ある材料が探索できる。しかし、ここでは紙数の都合上屋代本と覚一本について考察するにとどめる。

(I) 屋代本

これは、先に表示の如く、語り系現存本最古のもので、あるいは十二卷本形態の最古のおもかげを伝える本ではないかと考えられている。この本は四部合戦状本にないか、又は、まだ本文に入るまでに至っていない七つの記事を抽書している。これらは従つて、原平家にはなかつたと思われる。その他四部合戦状本や『源平闘諍録』の先行現存本と比較して屋代本に至つて増補されたとと思われる記事がいくつか抽出できる（括弧内は『日本古典文学大系』の章段名をさす。以後の章段名も同じ）。

(a) 抽書七段

- 一、義王義女仏閑事同出家事（祇王）
 - 一、入道相国為慈恵大僧正化身事（慈心房）
 - 一、流砂葱嶺事同宗論事
並高野御幸（高野卷）
- 但し、屋代本は卷六「祇園女御」本文中に入れている。

一、皇后宮亮経正竹生島参詣事（竹生島詣）

一、本三位中将重衡狩野介預事付け午前事（千手前）

一、新院殿島御幸事同御願文事（富士川合戦）

一、将門序（延喜聖代）

別冊、劍卷

(b) その他の増補記事

○「卒都婆流」に和歌を称える増補

○「鱸」に忠盛明石の歌、女房との歌の贈答

○「鹿谷」に成親祈禱の際の神の拒絶のしるし

○「吾身栄花」に成範桜町のいわれ

○「座主被流」の大衆の動的な描写

○「水島合戦」「老馬」の一部

○その他

注意すべきは、抽書である。この七段は後にもつと加筆されて、物語中の代表的説話になったものもある。（例、祇王）これらの増補を加えると『平家物語』が華かに抒情的になる。

(c) 覚一本

覚一本の成立（一三三〇年）は『平家物語』流動史上最も画期的な出来事である。覚一本成立の由来は、覚一本の一本である竜大寺本の奥書に、「而一期之後弟子等中雖為一句、若有廃忘輩者、定及諍論歟、為備後証□書留之也」とあるように後輩の為に自分の平曲を一句も誤たずに伝えたい為であつた。しかし、覚一本

は今日、九種類十一本が現存されていて、各本にかなり詞章の異同がみられる。しかしながら、覚一がこのような定着を考えた事は注目してよく、それまで無際限に増補改訂が行われてきた『平家物語』は、ここで一応成長期にピリオドを打つ事になる。定本作製の機運は、それ自体整理期にはいつたと解釈されるからである。本文は、屋代本、平松家本、竹柏園本、鎌倉本、百二十句をふまえて整理、集大成し、文章を推敲して成立したものである。屋代本になくて、覚一本にある記事を抽出すると、

卷一「鱸の事」（鱸） 「二条関白北方願立」（願立）

卷二「徳大寺沙汰」「善光寺炎上」

卷三「無文、燈炉之沙汰」「江大夫遠成の焼死」（行隆沙汰）

卷五「文覚荒行」（文覚荒行） 「実定卿と大宮との対面、待宵侍従の名のいわれ」（月見） 「春日大明神の事」（物怪

之沙汰） 「文覚文之沙汰」（文覚被流） 「忠度宮腹女房

の事」（富士川合戦）

卷六「木曾元服」（廻文） 「額入道西寂の事」（飛脚到来）

「西八条焼亡の事、舞い踊りの事」（築島） 「妙音院琵琶

引」（嗔声）

卷七「実盛雑談」（篠原合戦） 「平氏連署」（平家山門連署）

「経正都落」（青山之沙汰）

卷八「紀伊守範光の事」(山門御幸) 「四宮即位についての

平家の後悔」(名虎) 「妹尾と倉光との取組」(妹尾最期)

「平家五陣のかまえ」(室山)

卷十「八嶋院宜」(同上) 「法然上人戒文」(戒文) 「熊

野の事」(海道下) 「維盛青海波」(熊野参詣)

卷十一「陽成院狂病」(八歳の竜) (剣) 「腰越」(同上)

卷十二「紺搔之沙汰」(同上)

灌頂卷(屋代本は分立せず) 「父祖悪業の報いの事」 「女院往

生の事」(女院往生)

この他に、随所に漢詩や詩的韻律文を挿入している。これらの増補は百年あまりの間、語り伝えている中に包含するべき挿話は包含し尽くした事を物語るといえよう。覚一本には、今日一般的にいう平家の要素が凡て含まれている。これは原平家の成長の一つの到達点といえる。この間の成長には曲節としての平曲の発達が大きく関与している事を看過してはならない。

かくして、屋代本ではまだ素朴で、生硬だったこの物語が覚一本になると、記事の増補や発展がなされ、平家滅亡の本筋に豊かな肉付けが施されて『平家物語』という大輪の一文学が開花するのである。

覚一本は(他の異本も同じであるが)編年体的記述の中に紀伝

体をとりいれている。その為、挿入説話が独立説話になる傾向がある。「何々物語」とでも呼べるように一つのまとまった説話に発達した個所を次に示してみる。

卷一 祇王物語 鹿谷事件

卷二 座主流罪事件 西光物語 山門滅亡事件 康頼熊野信仰

物語

卷三 俊寛・有王物語 重盛死去 重盛物語

卷四 高倉宮謀反物語 競物語 頼政 鶴説話

卷五 月見物語 文覚物語 富士川合戦譚

卷六 新院死去 新院物語 小督物語 入道死去 清盛物語

卷七 北陸合戦譚 平家都落物語

卷八 宇佐行幸物語

卷九 宇治川合戦譚 木曾最期 一谷合戦譚 小宰相物語

卷十 内裏女房物語 重衡海道下 千手物語 維盛物語 横笛

瀧口物語 屋島合戦譚 高野御幸物語

卷十一 壇浦合戦譚 宗盛最期 重衡最期

卷十二 六代物語

灌頂卷 女院 灌頂卷

これらを分類すると、

1 女性説話 計七(女院を含む)内、出家譚、六(小宰相だ

けは出家しないで自殺)

- 2 仏教関係説話 広義に解釈すれば女性説話、列伝記事、宗盛、重衡最期などともいえる。

- 3 合戦譚 計六(含木曾最期)

- 4 列伝的物語 計四(新院、重盛、清盛が代表的、頼政も)

- 5 和歌を含む説話 一(月見)

- 6 歴史的事件の敷衍 計五

- 7 行幸物語 計二

- 8 英雄像(含武人悪僧) 計四(西光、競、文覚、木曾)

- 9 王朝的物語 小督、月見など

- 10 芸能説話(妙音院琵琶引、竹生島詣、青山之沙汰)

このような十種類の増補記事はそのままこの物語の性格と特徴というように名付けられて、平家を論じる好材料になつていゝ。仏教的要素・合戦譚・列伝記事・女性説話等が加わつて、いよいよ平家らしくなつたといえよう。一方これらの増補がされる事によつて、原平家の持つ編年体的記述による「平家滅亡物語」の構想は、その緊密性を失つた。また叙事詩的純粋性も減少した。そして、替りに抒情的要素が増大したのである。もし原平家を単色彩画とすれば、百年たつて成立した覚一本は多彩画といえるだろう。それでは何故、原平家はこのように増補されたのだろうか、そ

れは原平家の内包する矛盾から生じたものと考えるのが妥当であろう。原平家は歴史的事実が単に体験的な驚異的ではなくつた後の時代に、往時を振り返つて書かれたものである。このような歴史物語では事実の潤色、結果の合理化は必然の方向である。

つまり、原平家を成立させた要因である「時の懸隔」と「歴史の必然化」は、そのまま『平家物語』を成長させる要因にもなつた。

この物語は制作参加の意欲を喚起する主題だつた。それは、源平の闘争が全国的な規模で行われた為、歴史的体験をした者が多かったので、平家を聴いたり、読んだりした京都人や地方の人が、彼等の知識を付け加えたいと希望した為であろう。

こうして『平家物語』は増補されていつたのである。

(二) 詞章の発展

語りに供せられた平家の詞章が持つ意義は大きい。同時にこれも記事と同様、増補や変改の跡が著しい。俗に、その文体は「和漢混淆文」だといわれているが、それは決して始めからそうであつたのではない。原平家から屋代本あたりまでは、圧倒的に漢文調の文章だつた。それが、先に記事の増補でみたように、種々の要素が付加されるに従い、文章もそれにみあうように、和文脈をとり入れていつたのである。次にその詞章の増補、発展の様相を例示してみよう。

1 和歌及び和歌説話

屋代本になくて覚一本にあるものは、

巻五「待宵侍従の名のいはれ」(月見) 「忠度宮腹女房の事」

(富士川合戦)

巻七「経正都落」

巻十「熊野の事」(海道下り)

その他和歌十余首

これらは、本筋とはしばし離れて慌しい時代の激動にさからい、束の間の王朝的雰囲気醸成を醸成して、古きよき時代を偲んだり、武人の中にある王朝的文化の血筋を称えるもの(「忠盛」(「殿上闇討」) 頼政(「御与振」)「鶴」) 経正(竹生嶋詣、青山之沙汰、経正最期) 範光(山門御幸) 敦盛(敦盛最期) 重衡(海道下り) だつたりして、悲劇の緩衡的役割を果し、その抒情化を促進した増補である。

2 女性説話

原平家には、女性に関する記事が殆どない。多くは後の増補である。さらに興味深い事は、平家の女性は大部分出家し果てるので、女性説話が女性往生の仏教説話に転化している事である。

3 仏教説話

行長は慈鎮の保護下にいた。その為か天台宗の教化宣伝臭が認

められる。しかし、時代は天台宗のような旧仏教よりも、法然の率いる浄土宗の方に民衆は傾きつつあった。武士の勢力の伸張と共に浄土宗は彼らの信仰を得て発展していった。当然、増補の段階で浄土宗色を強くしていった。(宗盛被斬、重衡被斬)

4 院宣、牒状

話の筋を権威づけたり、正当化させる為に、或は切迫感を盛り上げる為にか、院宣、牒状は好んで増補された。これは語りの上でも効果があつた為で、この曲節は特殊なリズムを持った調子で、耳できいてもかなり面白かつたらしい(八嶋院宣)。

5 奇瑞

過去の出来事を懐古する場合、歴史の必然化が神仏の加護、または、因果応報で表現されるのである。いつてみれば平家全体がこの法則に支配されているといつてよい。特に本筋に関係する記事の場合、事件結果を必然化し、納得させる為に必ずといつてよい程奇瑞談がのせられる。それが個々の小さな挿話にも及んでいる。「巻一「鱸」、巻五「物怪の沙汰」、巻七「主上都落」終末部藤原基通の事等」この中、基通の事を例にとると『玉葉』では「摂政自然遁其殃、逃去雲林院信範入道方了」と形勢を判断した摂政が要領よく逃げた話を屋代本で、春日大明神を登場させて、次第に話が太仰になり、覚一本になると

摂政殿も行幸に供奉して御出なりけるが、七条大宮にてびんづらゆひたる童子の御車の前をつ(ツ)と走りとおるを御覧ずれば、彼童子の左の袂に春の日といふ文字ぞあらはれたる、春の日とかいてはかすがとよめば、法相擁護の春日大明神大織冠の御末をまもらせ給ひけりとたのもしうおぼしめす。(後略)となつて春日明神の御加護に理由を求めた奇瑞談になつている。

6 合戦場面

合戦場面には「宇治川合戦」「木曾最期」のように秀逸な描写が多いが、後の増補が相当ある。「宇治川合戦」は小林秀雄氏がこの部分に「太陽の光と人間と馬の汗」を感じとつていられるように躍動的、且つ、単純明快な人生を生きている武士の自然的姿を浮き彫りにした秀話といえよう。ここは四部合戦状本には「佐々木四郎高綱与梶原源太景秀、心中静先間並馬鼻打入」とだけあつて覚一本の両者の生ずき、するすみ争奪の顛末や先陣争い合戦場面等の勇壮な場面は後の増補である。

7 慣用句

(い) くも手、かくなは、十文字、と(ン)ばうかへり、水車、八方すかさずき(ツ)たりけり(「橋合戦」浄妙房の奮戦振り)屋代本以後次第に漢文調を脱して、行動が活写されるようになってから、戦闘場面は動的になり、このような慣用句が生まれ

た。

(い) 与力の輩、誰々ぞ

次に人名を挙げる時に、この詞章がよくつけられる。

(い) ふしまろび、こゑも惜おしまずなけれけり(僧都死去)

女性の愁嘆場は大抵、この詞章で間に合わせている。

このように慣用句を増補して、文章の調子が独特になる。

8 名乗

この物語では、双方名乗りあつて始めて合戦になる。これは、花やかに堂々と弁舌爽やかに名乗った方が勇壮活潑で、戦闘場面が面白くなるので、増補されたと思われる。

9 装束

合戦場面には名乗、慣用句の増補のほかに美々しい武者振りを描写する装束の紹介がある。巻五「富士川合戦」の大將軍維盛は屋代本では、

大將軍権亮少將維盛ハ 生年廿三 容儀躰拜絵ニ書クトモ筆

モ難レ及 馬 鞍 弓箭ニ至ツテハ照輝ク程ニ出立レタリケ

レバ 目出タカリシ見物ナリ

が、覚一本になると、忠度の装束をも紹介し「難レ及」に続けて、重大の鎧唐皮といふきせながをば、唐櫃にいれてかゝせらる、路打には赤地の錦の直垂に萌黄威にほひのよろひきて、連銭韋毛な

る馬に黄覆輪の鞍おいてのり給へり、副將軍薩摩守忠度は、紺地の錦のひたたれに、ひおどしの鎧きて、黒き馬のふとうたくましるにい(ツ)かけ地の鞍をいてのり給へり。

の装束描写の詞章が挿入してあり「馬、鞍」以下の文章が続く。

10 軍勢

軍勢を描写する為には、將軍、侍大將、主だった武士の名を連ね、人数、騎馬数を続けて記するのが普通である。この軍勢は諸本によつて、非常に異なるがある。一体に、後出本は数が大仰で、語り系よりも増補系が軍勢が水増しされる傾向にある。

11 名寄

この物語はその記録的性格から名寄を好んだ。9の將軍、侍大將などの名前を列記するのも一例であるが、この他に章段名となつてゐるものは「公卿揃」「源氏揃」「三草勢揃」等である。

「三草勢揃」には平家方の名寄がない。一体に坂東で作られた合戦譚は、軍勢や配置を大々的に記す傾向がある。巻四「嚴島御幸」の供奉連名は延慶本・長門本・盛衰記の増補系の他、八坂流の文禄本・中院本・加藤家本にある。覚一本は煩雑になると思つてか継承していない。

12 他本からの吸収

平家は実に寛大に他本の記事を吸収した。例えば、閑居友(大

原御幸)・嚴島御幸記(嚴島御幸)・六代勝事記(六代の挿話)・海道記(海道下り)・東関紀行(延慶本、長門本、盛衰記と関係あり)・十訓抄(鶴)・古今著聞集・方丈記(辻風、都遷、帰洛、法住寺合戦、大地震)・承久記・吾妻鑑・愚管抄その他多くの挙げる事ができる。

13 人物の理想化

この物語は編年体的形態がその原初の姿であつたが、次第にそれをくずして紀伝体的形態を加味していった。一人の人物に関する逸話を集結する傾向から、やがては新しい逸話を創作して、物語の構成均衡を破る程に成長してしまつた個所がいくつかある。とくに清盛や重盛のような主要人物には多くの増補がされて、理想化されている。

14 時代思想の反映

平家が始めて成立したのは鎌倉時代初期であり、覚一本は鎌倉末期、室町時代にも増補はされた。こうして流動していくうちに各時代の思想を吸収していった。時代が違えば同じ事件に対する受け取り方が変わってくるのは当然である。しかも平家はそれを詞章改訂、記事増補という二つの手段で貪欲に包含した。

(4) 浄土思想(妓王、戒文、横笛、重衡被斬、宗盛被斬、女院往生)

(ロ) 神国思想（教訓状、富士川合戦、物怪之沙汰、木曾願書、主上都落、遠矢、先帝入水など）

「仏法、王法」と並び称されるように平家物語中の二大思想

(ハ) 武士道思想（篠原合戦、信連、樋口被斬、継信最期）

15 劇的表現

初期の記録文のような文章から、それは急速に変化していった。卷二「西光被斬」に清盛と西光の口論の場面があるが、『源平闘諍録』はその部分を全く欠き「延」「長」「闘」の三本は「西光被斬」を「成親流罪」の前に簡単に報告しているにすぎない。屋代本から「西光被捕」と「被斬」が同一章段に含まれるようになっていく。

西光と清盛が互角になつて、のしり合う場面は劇的である。西光は成り上り者の気楽さから、清盛に同じ成り上り者ではないかと悪口を浴びせる。この部分は「白声」で語られるが、平曲は元来語りであるから劇的にならないように会話の部分を「白声」で押し通すことはしない筈なのに、この部分は「白声」になつていく。これは後の増補である。

16 韻律的表現

これも原平家には多くなかつたであろうと思われる。何故ならこの部分は「三重」という平曲曲節中最も美しい曲節が使われる

からで、この節は寛一時代に完成したと思われる。卷六「小督」の有名な七五調の文章

亀山のあたり近く松の一むらある方に かすかに琴ぞきこえける、峰の嵐か 松風か たずぬる人のことの音か おぼつかなくはおもへども 駒をはやめて行程に 片折戸したる内に 琴をぞひきすまされたる

は後代増補作者の功績である。この種の文章は、平家に抒情詩的な美しさを添加している。

17 故事来歴

これも好んで増補され、殊に増補系では甚しい。中国や我国の先史先例を尋ねる文は全篇にわたつてある。そして、同類説話を付加して詞章を膨張させていくのである。これは行きすぎると本来の話の筋が中断されるし、個々の話の面白さにひきずられて全体の印象が散漫になつてくる。

寛一本までの成長期にかかる多くの増補がなされ、原平家のおもかげを失つていく一方、その文学性は一そう強調されるのである。その間に曲節の方も発達し、拾（合戦場面の劇化）、折声（悲哀表現、説話の悲愴化）、初重、中音、三重（優雅、風雅、悲哀、悲壮）などが完成された。つまり、寛一時代までに記事、詞章、曲節と平家物語はあらゆる面にその成長を遂げたのである。

それ以後は平曲界の八坂、一方二流分派が物語るように下降線を辿る動きで、躍動的な本質的成長ではなく、周到、精密、繊細な方面に注目していったにすぎない。

三 流布本平家物語——『平家物語』の到達点——

流布本は、元和七年に初版された諸本中最後出版である。江戸時代最も隆盛だった波多野流の台本とされた事情もあり、何度も刊行され、文字通り平家諸異本中最も流布したものである。しかも、今日、平家といえば即流布本といういわば定本的扱いをうけている。この評価が果して妥当かどうか検討してみよう。

まず、その成立事情を考察する。元和九年刊片仮名混り整版本に「此平家物語一方検校衆以数人之吟味改字証加点多句詭元和七孟夏下旬令開板早、或人日庶幾記其姓名云々、故今準之而已」とある刊記によると、流布本は妙観派・師堂派・源照派・戸嶋方の四派に分裂していた一方流の集大成本と解釈できる。平曲は一方八坂二流に分派したが、結局、八坂流は一方流に凌駕されてしまうので、一方流の集大成本を意味する刊記は重大である。

当時師堂派では高山、中山検校、妙観派では木村検校の時代だった。ところが実際は、最も采配をふるつたのは中山久一検校で、殆ど独走状態だったらしい。「一方検校衆以数人之吟味」の權威

付けに対して反感を抱いた検校衆から、流布本制定に参与した検校の名を明記するようにとの抗議がでている程で、誕一派の編集した『西海余滴集』には久一がかなり強引な改削をやつたのを非難した記事がでている。ちなみに、久一は久一本（現在、散佚）といわれる独特な台本をもっていた人である。また、本文を調べると、欠除の章段が師堂派の下村刊本と同じである（「祇王」を「吾身栄花」の後に入れている点は覚一本と同じ）こうしてみると、流布本は師堂派の一異本にすぎないのではないかと思われる。もう少し詳しくみてみよう。

(i) 卷一「額打論」の香竜寺を広隆寺と改悪している。これは久一のやつた事で、西海余滴集がその事情については詳しい。

(ii) 「鏡の巻」「剣の巻」を欠く。これは流布本の重大な欠陥である。秘事とはいえ、本筋にも関係のある記事なので無造作に削除はできない筈である。妙観派の台本にはこの章段があり、下村刊本にはない。

(iii) 卷八「猫間」の最後に「牛飼は終に斬られにけり」の句が増補されている。卷十一の「一門大路被渡」に、

大臣殿の牛飼は木曾が院参の時、車やりそんじて斬られたりし次郎丸が弟の三郎丸にてぞ有ける。

から思いついてつけ加えたのであろうか。これも下村刊本と同じ。

(三) 下村刊本と同じく「嚴島御願文」「邦綱卿死去」「十郎行家信太教師の最期」「断絶平家」を欠いている。

(四) 皇室関係の章段名に殊更尊敬表現を用いている。

卷四「若宮出家」を「若宮御出家の事」 卷十一「先帝身投」を「先帝御入水」

これはこの物語の成立した中世の感覚ではなく、江戸期のそれである。

(五) 文法上の改削

(1) 卷十「内裏女房」 覚一本「かざりとてたちわかるれば露の身の君よりさきにきえぬべきかな」を流布本は「きえぬべきかは」

(2) 灌頂卷「女院出家」 「郭公花たちばなの香をとめてなくは昔の人や恋しき」を「人ぞこひしき」とする。

(3) 卷四「颯之沙汰」 「法皇の御事をたりふし申されければ」を「折ふし」としている。「たりふし」は山田孝雄氏の研究によると「垂伏」のことで「切に」という意味である。流布本のように直すという意味が違ってくる。

その他、下二段活用動詞を下一段活用直している箇所がある。このように当代では理解できなくなった言葉などを江戸初期の時代感覚で改めている。その為、流布本は中世期に成立した語り物としての『平家物語』を具現したものとはいいがたい。そして

山田孝雄氏が『校定平家物語』の序で述べていられるように、流布本は「平家繙読の底本」としては不適当だと思う。

更に、流布本は覚一本の難解な点を理解しやすいようにする文章上の操作をしている。次に例示してみる。

(1) 言葉の添加（○印の部分）

(1) 主語「覚」山攻めらるべしと聞えしかば

「流」法。皇。の。山。攻。め。ら。る。べ。き。由

(2) 形容詞句「覚」山門の大衆 「流」昔。より。山。門。の。大。衆

(3) 指示代名詞の内容を示す

「覚」その営みの外は他事なし

「流」朝。夕。は。唯。軍。合。戦。の。そ。の。営。み。の。外。は。他。事。な。し

(4) 副詞「流」大にさはかれけれ、其時ゆき向かひたる侍共

(5) 助詞「流」甲の緒をしめて

(6) 助動詞「流」仰せられたりければ

(7) 発語「覚」軍敗れにければ

「流」去。程。に。一。ノ。谷。敗。れ。に。け。れ。ば

(8) 会話に卜書「覚」悪人のたすかぬべき方法候者しめし給へ

「流」……方。法。候。は。ば。し。め。し。給。へ。と。申。さ。れ。け。れ。ば

(9) 強意表現

△接続詞「流」剩へ。安元元年十二月九日

△強辞「流」歌の上手にてぞおはしける

△場所「流」東塔の南妙光坊におはしけるが

(10) 人名を丁寧にする 「覚」さるほどに本三位中将をば

「流」さる程に本三位中将重衡の卿をば

その他簡潔な表現を欠いて説明がすぎる文章が間々ある。

(四) 削減

(1) 重要記事のカット 「請文」の「さるほどに平大納言時忠卿

をはじめとして平家一門の公卿殿上びとよりあひ給ひて御請文のおもむき詮議せらる」の「平家詮議の場」が「流」はない。

(2) 重要でない人名 名寄の侍の名は煩雑をきらつてか間引いている。

(五) 改変

(1) 通名を用いる 義経→判官

(2) 主語述語を接近させる

「覚」身のたゝいまはろびんするをも

「流」唯今身の亡びんずる事をも

(3) 直接的表現を好む

「覚」涙を流さずといふことなし

「流」涙をながしけり

(4) 表現を劇的に

「覚」あの中将が京よりいひをこしたる事のむざんさよ

「流」是見給へ宗盛、京より中将が云おこしつる事の無慙さよ

(5) 感慨の言葉の変化 めでたかりし→めづらしかりし

(6) 慣用的語法の変化

「覚」ただなくより外の事ぞなき

「流」引被いてぞ臥し給ふ

(六) 改悪

(1) 「覚」ひをくくりの直垂に糸くずの袴

「流」直垂と袴を誤つて逆にしている。

(2) 香竜寺→広隆寺

(3) その他 次の記事が欠けている。

(1) 「大納言流罪」の「美野知行葛」

(2) 「祇園女御」の「亀のこと」「賀茂祈」

(3) 「北国下向」の「大將軍数多」

(4) 「嚴島御幸」の「弁内侍」

このように枚挙のいとまない程詞章の相違は随所に認められる。流布本は、覚一本よりも語りに適するようになって、会話が劇的になり、敬語表現を多く用いるようになったといえるだろう。だが、あまりに平易平明をねらつた為、詞章を改悪したり、また、いたずらに生まましい表現を用いて、本来の大様さを減少させ

ている嫌いがある。

以上によつて、流布本はこの物語の諸本を代表するものではなく、単に、江戸期に多くの人に読みなされた一異本を出ないと認められよう。しかし、ともあれ、この流布本は原平家が生まれて四百年余りの「文学、平家物語」「平曲、平家物語」が到達した一地点を示す事は事実である。

結 語

平家の尨大な異本中、屋代本・覚一本・流布本を検討した結果、以上のように増補改訂の跡が著しい事が容認された。

しかし、増補改訂は成長ばかりではなく、後退をも含むのである。では、何故平家にかかる変動をしたかという、やはり何といても、「語り」に供せられたからではないだろうか。そこから派生する必然的結果、それが即ち、平家の流動の根本の原因と思われる。そして、四百余年にも亘つてある意味で制作活動が続けられたこの物語の創作的エネルギーに驚嘆するものである。

このように多くの異本群の中で、我々は一体どこに拠るべきか。流布本は、今日信奉者を多く得ているが、これについては少なからず不満がある。覚一本はどうであろうか。たしかに、覚一本は、平家成長の頂点を示す集大成本である。しかしこれとても、原平

家の一直線上の成長発展ではない。むしろ、今日のいわゆる平家物語らしいさを最も多く伝えている代表的異本と認識するのが最も妥当であろう。

原平家も『平家物語』なら、覚一本も『平家物語』、四十八巻という大部の『源平盛衰記』も流布本もすべてみな『平家物語』なのである。つまりこの物語はその「流動の様相」の中にこそ本質があるのであつて、その文学性を論じる場合、この流動性を閑却してはならないと思う。多くの増補記事、詞章の変改は雄弁にその辺の事情を物語つているのである。

参考文献

流布本平家物語の性格と意義 富倉徳次郎（『国語と国文学』昭和31年7月）

平家物語の研究 佐々木八郎

平家物語の形成——原平家のおもかげ—— 永積安明（『日本文学講座5 日本の小説』）

平家物語の創出・流動・没落を中心として 谷宏（『文学』昭和26年9月）

平家物語の成長——原作平家物語より流布本まで—— 富倉

徳次郎（『解釈と鑑賞』昭和28年11月）

（昭四〇 日文卒

）